赦しの認知科学的研究

研究代表者　白井　理沙子
（理工学術院総合研究所　次席研究員）

１．　研究課題

赦しにおけるヒトの知覚・認知処理の役割を認知科学的アプローチによって検証する。罪を償った後や十分に謝罪をした後であっても他者や社会集団による否定的な意味づけが拭われない状態が続く場合がある。こうした行き過ぎた排斥行為は対象のメンタルヘルスや社会復帰に重大な影響を及ぼすことが指摘されている。本研究はヒトがヒトを赦すプロセスを明らかにするために、無意識的・潜在的な情報処理過程に着目した。赦しの基盤となるメカニズムを明らかにすることで、人間社会におけるさまざまな倫理的問題に対応する規則の構築や臨床現場における応用に貢献することを目指す。

２．　主な研究成果

他者を赦している状態の一つの側面として、赦せないと感じた出来事や対象の忘却が挙げられる （Lichtenfeld et al., 2015）。本年度は特にヒトの情報処理過程における忘却のシステムに焦点を当て、どのような方略が無意識的・潜在的な記憶の忘却（赦す状態）につながるのかを検証した。実験系は Lichtenfeld et al. (2015) を参考として構築した。実験の結果、いずれの赦しも記憶の忘却に影響を与えなかった。これは、相手のことを想う感情的な赦しが記憶の忘却に影響を与えるという先行研究の結果と反した結果であった。日本と海外では赦しに伴う忘却プロセスが異なる可能性を示した結果であり、今後の研究では国や地域と関連した個人の価値観が赦せなさとどのように関係しているのかを検証していく予定である。

３．　共同研究者

該当なし

４．　研究業績

4.1 学術論文

Okazaki, C., Shirai, R., Salcedo Gil, R., Ulfert, A. S., & Watanabe, K. (2026). Influence of Imagined Human-Robot Interaction on Robot Perception. In H. Osawa, H. Lindgren, A. Steinfeld, M. E. Foster, S. Okada, & H. Zhu (Eds.), *HAI 2025 - Proceedings of the 13th International Conference on Human-Agent Interaction* (pp. 375-377). Association for Computing Machinery, Inc. （査読付き国際会議論文）

4.2 総説・著書

該当なし

4.3 招待講演

該当なし

4.4 受賞・表彰

該当なし

4.5 学会および社会的活動

Shirai, R., Mukai, K., Watanabe, K. (2025, 19th June). Judgments of moral violations affect the center of pressure of the observer's body, The Australasian Experimental Psychology Conference (EPC) and Asia Pacific Conference on Vision (APCV) Joint Meeting 2025, Sydney, Australia. （ポスター発表）

Okazaki, C., Shirai, R., Salcedo Gil, R., Ulfert, A. S., & Watanabe, K. (2026, 10-13 November). Influence of Imagined Human-Robot Interaction on Robot Perception. HAI 2025: Human-Agent Interaction, Yokohama, Japan. （上記国際会議のポスター発表）

白井理沙子・渡邊克巳（2025/9/12）. 着ぐるみ恐怖と関連する認知的要因. 日本認知科学会第 42 回大会. 早稲田大学 早稲田キャンパス.（ポスター発表）

５． 研究活動の課題と展望

「２. 主な研究成果」に含んだように、今後の研究では国や地域による価値観がどのように赦せなさの忘却と関係しているのかを検証する必要がある。さらに赦している状態の行動・生理反応を測定する研究課題を構築し、意識・無意識の両側面の赦しの状態に焦点を当てることを検討している。